**〔解　説〕**

明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

**〔花渡しの段　あらすじ〕**

大和の妹山の太宰家後室定高と紀国の背山の大判事清澄は長年吉野川を挟んで反目しあっていましたが、定高の娘雛鳥と清澄の息子久我之助は恋仲です。久我之助が仕える天皇の寵愛を受ける鎌足の娘采女は宮中の混乱から逃れますが、采女を探す入鹿は両家に疑いをかけ、雛鳥を入内させ、久我之助を自分に仕えさせよと、無理難題を命じるのでした。

そして、互いを思いやる両家の思惑は川を挟んで行き違い、久我之助と雛鳥は若い命を散らすこととなります。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。　　　　　　　　　　　（一般社団法人　義太夫協会発行）

**花渡しの段**

　奈良の都の八重九重、禁裏守護の太宰の館。入鹿公のおなりとて、ざざめき渡る奥女中。召しに応じて大判事、袴のひだも角菱ある、不和なる中の定高が屋敷。互にそれと白書院、目礼もせずつっと通り、

「入鹿公の御座の間ヘ、そ案内仕れ」

と、云ひ捨てて行かんとす。定高声かけ、

「まづしばらく、珍らしや大判事殿、太宰の少弐が跡目を預かるわらはが屋敷。挨拶もなくお通りは女と思ひ侮ってか。ただし武家の礼儀御存じなくば、ちっと御伝授申さうか」

と、詞の非太刀打掛け捌き。さはがぬ清澄空き、

「少弐存生より領地の遺恨により、この屋敷のうちへは今日まで足踏みもせぬ大判事。入鹿公のお召しによって参ったは勅諚を重んずるゆゑ。皇居の間へ出仕の心、女童に用なければ、挨拶する口は持たぬ」

「イヤそれなればなほもって、今日入鹿様おなりなれば大内も同然。大判事に御疑ひのことあって、この定高に吟味いたせとの勅諚。この詮議済まぬうちは一寸も御前へは叶はぬ。お控へなされ清澄殿」

「ムヽハテ珍らしきことを聞く。君御詮議の筋あらば検非違使に仰せあって拷問あらんになんの御遠慮。もとより御疑ひ蒙るべき覚えなし。なまぬるき女の吟味、受けるやうな清澄でおりない。御身、見事詮議して見るか」

「ヲヽ太宰の後家この定高が、きっと詮議して見せふ」

「イヤ小癪な。そこ退いてはや通せ」

「まかりならぬ」

と根に持つ遺恨、互ひに折れぬ老木の柳、松の間の襖押し開かせ、

「出御なり」

との声に二人も飛びり、恐れ入ったるばかりなり。入鹿の大臣寛然と上段のより遥かに見下し、

「ヤア大判事。未明より参内せよと勅使を立つるに甚だの遅参。アレ見よ今日は午の上刻。流星南に出でて北にくするは、萬乗の位に即くまろが吉星。それほどのこと知らぬ大判事でなし。ただし入鹿に仕へるが不足と思ひ、身を退かん下心か。緩怠なり」

ときめ付くれば

「コハ御諚とも覚えず、いま一天四海君の御手に属するとはいひながら、いまだ残党先帝に心を寄する族あって帝都を窺ふ折から、われらが領地紀伊国は、西国南海のにて大事の。弓を張り矢尻を磨くに隙なければ思はざる遅参。その上忠臣第一の大判事に、なにごとの御疑ひ」

と憚りなくぞ申しける。

「ホヽその仔細といっぱ、先帝の采女の局を、まろが后妃に定めんと行方を尋ね求めるところ、猿沢の池へ入水せし由。いかにしても合点行かず。察する所采女がありかは、判事そちがよく知ろうがな」

と、思ひがけなき疑ひに、清澄不審の眉をしはめ、

「コハ存じ寄らざる儀。その采女の御事は、猿沢の池に捨身ありしとは誰知らぬ者ござなきに、われらが行方存ぜしなどとは何を目当ての御仰せなるぞや」

「ヤアとぼけな。汝が伜久我之助は采女が付人ならずや。その親たるそちなれば、よも知らぬとは云はれまじ。サア真直に白状せよ。陳ずるにおいては計らふべき旨あり」

「イヤのう大判事殿お聞きありしか。わらはに仰せ付けられし詮議とはこのこと。サア覚えがあらば申されよ」

と云はせも立てず、

「イヤ黙り召され。女の差出るところでなし」

「イイヤ勅諚を受けての詮議なれば、勅答の有無によって、その座はちっとも立たしはせじ」

と、膝立直し詰寄って、双方挑み争ふたり。入鹿の大臣大口開き、

「ハヽヽヽイヤ巧んだり拵へたり。定高が領分大和の妹山、清澄が領地紀の国背山。隣国の論により、互に確執せしとは表の見せかけ。内々には申し合はせ、故主の帝へ心を通はすおのれらと、わが眼力に違ひはせじ。さすれば天皇采女は両家の中に隠し置かんも知れざるゆゑ、大判事が詮議を申し付けた定高、コリャそちにもこの疑ひはかかるぞよ」

「これはまた君の勅諚とも覚えませぬ。夫少弐より仲悪き大判事殿。なにゆゑ申し合はさふやうもなし。私にまでお疑ひは恐れながら」

「云ふな女め。さほど音信不通の中なるに、大判事が伜久我之助。そちが娘雛鳥と、密通いたしをるはいかに。イヤ知るまじと思ふか、伜どもが縁につながれたる汝らなれば、両方ともに吟味は逃れぬ。なんと肝にこたへふが」

と飽くまで邪智の一言に、なに思ひけん大判事、席を蹴立て行かんとす。すかさず定高が刀のこじりむんずと取り、

「コレ待ち給へ清澄殿。気相変へてコリャいづくへ」

「ヤアいづくへとは、親々が不和なる仲を存じながら、忍び逢ふ伜が不所存。引捕へて吟味せねば、子供が縁を幸ひに和睦せしと云はれては、わが家の恥辱となる」

「ヲヽそりゃこの方も同じこと。一且は武士の意地。いまさら仲が直りたいばかりに娘にわざと不義させしと、世上の人にせられては、過ぎ逝き給ふ夫へ立たぬ。わらはも共に」

と裾引上げ駈出す二人をはったとめ

「私の趣意に立ち騒ぐ尾籠やつ。汝らが伜の不義を吟味はせぬ。まろが尋ぬるは采女がありか。サアいづれかなりと早く云え。なんと〳〵」

「イヤ伜が性根はいざ知らず。采女殿の儀はかって存ぜず。わが詞に偽りあらば弓矢神の御罰を受けん」

と、刀すらりと抜放し、てう〳〵とし、

「この上にも御疑ひあらば、いかほどの拷問なりとも、サア遊ばせ」

とどっかと坐す。

「ヲヽわらはとても少弐が妻。家に換へて采女殿はかくまはぬ。水責め火責めに逢ふとても、知らぬことは存じませぬ」

と詞するどに云ひ放す。

「ムヽしからば采女が詮議は追って。まづ汝らが面晴れなれば、かくまはぬという潔白に、定高は雛烏を入内させよ。まった大判事も覚えなきに相違なくば、久我之助は今日より、朕が目通りへ出勤させよ。きっとその旨心得よ」

と、なにがな探る当座の難題。二人は胸にぎっくりと、答へもしばしなかりしが、ややあって詞を揃へ、

「かくありがたき勅諚を」

「互の子供が違背いたさば」

「オヽ云ふにゃ及ぶ」

とあたりなる生け置く桜の一枝押っ取り、

「得心すれば栄える花、背くにおいては忽ちに、まろが威勢の嵐にあて、マッこの通り」

とに、はっしと打折り落花微塵。『はっ』とばかりに親々の、心もともに、散乱せり。なほもゆるまぬ大音上、

「ヤア〳〵弥藤次はやく参れ。汝はのをもって、香具山の絶頂よりきっと遠見を仕れ。コリャ〳〵両人よっく聞け。もし少しでも容赦いたさば両家は、従類までも絶やするぞ。性根を定めはや行け」

とせき立つ諚意に親々の思ひは千々の胸の中。見せぬおもてに忠と義を、張詰めし気のたゆみなく、打連れてこそ出でて行く。誠に秦の趙高が、馬と欺く小牡鹿の、入鹿が威勢ぞ類ひなき。かかるところへ中門より追ひ〳〵駈入る鎧武者。

「御注進」

と呼ばはって、御白州に頭を下げ、

「河内の国に武智郡司安彦。先帝に味方をして大鳥の城に籠りしを、官軍残らず馳せ向ひ、敵を攻付け一昼夜に落城。大和に安曇の文次宗秀、当麻の辺りに陣を取り、南都を攻むるその結構。馳向うて戦ひしに味方の官軍利を失ひ、残らず敗北仕る」

と息つぎあへず言上すれば、

「ハヽヽヽヽもの数ならぬ逆徒のやつばら。朕馳向うて微塵にせんぞよ。かのがに勝れし稀代の名馬、吉野の牧より狩出したる、その馬引け」

と広庭へ引出させ、欄よりひらりと打乗り、名馬の勇み。手綱かいくり、しと〳〵〳〵。の音はりんりん〳〵。綸言誰か背くべき。大地狭しと馬上の勢ひ、刻むひずめものこだま

「いそふれ、やっ」

と出陣の駒をはやめて駆けり行く。